

■ ハーカニヤの砂漠

雨の音が鼓膜を撃っていた。

傘を叩く雨粒が、アスファルトで跳ねる水飛沫が熱を洗い流して夜の色を濃くしていく。はやては路地の奥、街灯も差し込まない塗り潰された黒い陰の中を見ている。

暗がりの中で何か動いた気がしていた。

見間違いな気もした。けれど、気になつてずっと、室外機やゴミ箱が並ぶ薄汚い路地を見つめていた。雨音が生き物の気配にでも聞こえたのだろうか。一体、どれだけ目を眇めて居ただろう。夜の雨に、指先が冷たくなり始めていた。

やっぱり、気のせいだったのだろうか。そう思い、はやては踵の向きを変える。家に帰る方へ。

そのとき、視界の端で赤い光を見た。

点のように灯った、それは何かの目。室外機の先、店の勝手口の手前で二つの赤い目が宵闇に映えている。あ

まりに暗く、汚れて、何もかも渾然一体と成った汚濁の塊の中で、確かに燈る光。何の目なのかはわからない。猫にしては大きい気がして、でも、人にしては輝いているような気がして。

赤い目が瞬きをした。それは眼窩を滑り、はやてを捉えた。

はやては雑然とした路地に足を踏み入れた。雨が足を汚し続けている。耳がその雨音に塞がれて行く。傘が路地の壁にすれる耳障りな音を鳴らしながら近づいても、その目ははやてを見つめたまま動かなかった。

そして、はやては彼女の前に立った。

十歳前後の、赤い目をした少女が廃棄物に埋まるようにしてこちらを睨みつけていた。

はやては傘を差したまま彼女を見下ろして、何も疑問は抱かなかつた。ほつれ黒ずんだ髪に隠れるようにして猫に似た耳がこちらを向いていた。足元に溜まる油の浮いた雨水を見れば、毛が乱れぼさぼさになった細く黒い尾が沈んでいる。

使い魔か、何かなのだろう。

だった、でも良いかも知れない。

ゴミ溜めの中に転がって、立ち上がることも出来ないまま、ただ顔を歪めて耳を立て、声無く威嚇することしか出来ない彼女は恐らく捨てられたのだろう。彼女が転がる生ゴミの上に、破けた腹部から溢れる血が流れていた。放っておけば死ぬから、わざわざ契約を解くのも面

倒だった、そんなところだ。

雨に濡れた長い髪は、元は金に近かったのだろうか。そんなことを思いながら、はやては一步、彼女に近づいた。

「——っ。」

耳に、今度こそ低いうなり声が聞こえた。

雨の中にぼたぼたと血を垂らし、全身ずぶ濡れになつて寒さに震えて、倒れたまま見上げることしか出来ないまま、彼女ははやてを拒絶していた。はやては顔色も変えないまま、独り言を呟く。

「怖くない、怖くない……、をやったら指食いちぎられそうやな。」

自分でも馬鹿馬鹿しく思いながら口にして、傘を彼女に差し掛けた。冷たい雨に打たれながら、はやては遠く通りからの街灯を背にして、彼女に向かって薄らと笑った。「とりあえず、うちに来うへん？」

うなり声と睨みつける赤い瞳だけが爛々と輝いている。

はやてはくす、と小さく笑い声を漏らすと、彼女をゴミ溜めの中から抱き上げた。抵抗も出来ないではやてを睨む彼女を見つめ返し、はやては彼女を背負う。

そうして、汚泥の路地を歩き抜ける。

同じ傘に彼女を入れて。

「フェイトちゃん、ね。」

首に掛かっていたプレートの名前を呟くと、耳の裏で

聞こえていた威嚇の音が小さくなった気がした。

○

「はやてえ……、別に、はやての家っちゃはやての家だから、はやての良いようにすれば良いと思うけどさ。とんでもないもの、拾って来たもんだよな……。」

ヴィータが部屋の隅を見てぼそつと呟いた。お風呂から上がって来たはやては髪を拭きながら困ったように笑う。

「え、えつとお……、せやつて放つておけなかったんやもん。」

そうすると、ヴィータは肩を落としてソファに身を沈めた。

「はやてらしいっちゃ、はやてらしいけどさあ。」

はやてがリビングに揃っているシグナム、シャマル、ザフィーラ、リイン、アギトの顔を見ると、みなヴィータと同じような反応だった。らしいけれどそれにしても、というような目。

頬を引つ掻くと、はやてはちらつとリビングの隅、台所にほど近い一角へ目を向けた。段ボールに敷き詰めたタオルの上で、古い毛布に包まった件の拾い猫がこちら

を見ていた。毛布の奥の暗闇で、赤い目が光っている。それは特にはやてをよく観察していて、はやては居たたまれないものを感じた。溜め息を吐いて、はやては大きなソファの真ん中、シャマルとシグナムの間に座る。

「怪我、大丈夫なんよね？」

シャマルは少し考えるようなそぶりを見せて、小さく頷いた。

「ある程度治療魔法も掛けましたし、処置もしてますから大丈夫とは思いますが。使い魔は基本的に病気にはならないので、破傷風とかの心配はありませんし。

ただ、だいぶ衰弱しているみたいなので、体力は気がかりですね。」

どちらにせよ、彼女の契約者が契約を解いたら、彼女はこの場で消えるだけだけど、とは、判っていてもはやてもシャマルも口にはしなかった。

「にしても、あいつ、ちよつとくせーんだけだ。

風呂に入れなくていいの？」

テーブルの上であぐらを掻いたアギトがさも面倒くさそうに言った。隣に座っていたリインがあわててアギトを小突くけれど、二人の間のひそひそ会話は「だつて臭いだろ。」「それはそうですけど・・・。」と、リインの内心を覗かせるものだった。それに答えるのはシグナムの溜め息混じりの呟きだった。

「今日は無理だろう。」

さつき治療する時に、少し内蔵が見えたくらいだから

な。」

リインとアギトが明らかに顔を歪めて固まった。はやてが彼女を連れ帰ってきて、事情を話してからそうそう、はやてはあまりにずぶ濡れなので風呂に叩き込まれ、シャマルとシグナムが彼女の怪我の面倒を見たから、リインとアギトは彼女の容態は知らなかった。はやてはぼんやり、どうりで自分の服があんなに汚れた訳だ、と思つた。深く考えるのは怖いから、それ以上は踏み込まないけど。

「なるべく清潔にはしてあげたいんだけど、

あの子、死力を尽くして抵抗しそうだから。

もう少し様子を見てからね。」

シャマルの手には赤い線が走っている。シグナムも隠してはいるけれど、腕にちよつと怪我をしている。あれだけ警戒心を剥き出しの彼女の腹の傷を見るのは並大抵の努力では無かったのだろう。担ぎ上げられて運ばれるくらいのことは観念して受け入れても、言い方は悪いが服をひんむかれて腹の傷を触られるのは本当にいやだったということだ。

「そういうえば、こいつがもともと着てた服、どうするんだ？」

洗って落ちる汚れとは思えねーけど。」

アギトに訊かれて、はやてはうーん、と悩む声を上げながら、彼女の方をちらつと見た。毛布の中で赤い目がこちらを見つめている。

「一応洗ってとつて置こうと思つとるよ。」
ふーん、とアギトが相槌を打った。

はやては壁掛け時計を見上げた。時刻はもう日付が変わったことを伝えている。

「そろそろ寝るとしますかー、つて言いたいところやけど。

あの子どうするべきなんかな。

一人で放つておいてええもん？」

そうはやてが疑問を口にする、それまで黙っていたザファイラが尾を一度振った。

「私がここで寝ますから、主は安心してお休み下さい。」
そっか、ありがと、とはやてはザファイラの頭を撫でた。ザファイラが目を細めて耳を伏せる。

「じゃあ、よろしくなザファイラ。」

そう言つて立ち上がり、はやては部屋の暗がりには居る毛布の塊へと向き直った。

「おやすみ、フェイトちゃん。」

なんもせえへんから、とりあえず今日のところはええ子で寝といてな。」

：

ご飯は手つかずのまままで冷えていた。

はやてはそれを見下ろして、腕を組んで難しい声を絞り出す。

「フェイトちゃん、ご飯食べへんなあー・・・。」

リビングの隅、台所にほど近い所に置かれた段ボールで出来た小さなスペース。そこに丸まった毛布の前に、台に置いた朝ご飯を出してから一時間が経つ。朝起きてからの一番で調べた結果、猫を拾ったら病気の検査とかをして、家では慣れるまで放つておけと書いてあった。元気な猫なら勝手にご飯も食べて、適当に元気にやうて行くのだからうけれど、この黒猫はちよつと事情が違う。「食べられへんのやったら、やつぱ病院連れてくべきなんかなあ・・・。でも、使い魔やし・・・、使い魔に点滴とか聞かへんもんなあ。」

ぶつぶつと呟きながら、はやては知識をいろいろと引っ張り出す。使い魔は魔法生命体だから、ご飯を食べることは絶対不可欠なことではない。必要なエネルギーは契約者から注がれるからだ。だから使い魔の傷は治りが早いし、契約者の力量にもよるが大抵の怪我は治せる。けれど彼女は、あそこで明らかに捨てられていて、契約の解消さえ疎かにされる程にぞんざいに扱われている。だから、そんな契約者がフェイトの傷を治す為に、今も何処かでそれだけの魔力を注いでいるとは思えなかったし、注ぐことがあるとも思えなかった。契約者からの力が無い以上、彼女はなにか食べるなりなんなりをして、体を維持しようとしなければならぬはずなのだけれど。

「なあ、シヤマルうー。」

フェイトちゃんの怪我つてどうなんー？」

洗濯かごを持ってリビングに入って来たシャマルは、立ち止まってはやての方を振り向いた。窓の外から朝の白い光が差し込んでいる。

「表面はまだ傷が残ってますけど、お腹の中は塞がってますよ。動くのはまだ痛いかもしれないですけど。」

だから、単に食べたくない、っていうのが大きいんだと思いますけど。」

リビングの窓を開けて、シャマルが庭に出て行く。そこから流れ込んで来た甘い風の匂いが鼻を掠めて、はやてはますます深く腕を組んだ。やつぱり早いところ、お風呂に入れてしまいたかった。でもそれにはやつぱり、ちよつとは慣れてもらわないといけないし、ご飯を食べてもらおう方が優先事項である気がした。

「腹がすけば勝手に食べるんじゃないかねーの？
バカそうな顔してたし。」

アギトがいつの間にかはやての顔の隣に浮いていた。あんまりの言い草に、はやてが半眼で見遣ると、アギトは意地悪に舌を出した。

「もし、まだどつか調子が悪くて食べられへんのやつたら困るやんか。」

それに、フェイトちゃんめっちゃめっちゃ根性がある子で、死ぬまでハングリーストライキされる可能性だってまだあるんやぞ？」

嫌な可能性だな、それは、とアギトが顔面を引き攣らせて呻いた。はやては朝食にと出したお膳をもう一度眺

める。お腹が痛かったりしても大丈夫なようにと思つて、かなりご飯を柔らかく煮てからちよつとつぶしたおかゆと、味の好みは判らないからとやたらと種類を揃えた薬味が8種類並んでいる。猫だからにぼしが好きなんじやねーか、とヴィータが言うから、この前スーパーで奮発して買った高級にぼしも小皿に盛りつけてある。

はやては溜め息を一つ吐くと、丸まっている毛布へと近づいた。覗き込もうとすると、中からうなり声が聞こえる。毛布の端からぼさぼさの尻尾がはみ出しているのは気付かないくせに生意気なもんだ、とはやては唇に笑みを引いた。そして、それ以上近づかないでその場にしやがみこむ。

昨日はごたごたしていて、やり忘れてしまったことがあった。まだ遅すぎるということはないだろうから、はやてはそれをやり直そうと思う。

「フェイトちゃん、私な、八神はやて言うん。」

20歳やから、フェイトちゃんより年上やね。」

毛布の隙間から漏れる低い声は変わらない。覗いている尻尾も動かないけれど、多分聞えてはいるだろう。はやてはことさら柔らかい笑みを浮かべて、穏やかなリズムで言葉を紡ぐ。

開いた窓から滑り込む、この花やかな朝の香りと日差しが、彼女にも届くようにと想つて。

「昨日、フェイトちゃんが倒れとるのを見つけて、放っておけなくなつてうちまで連れ帰って来たんよ。」

このご飯も、フェイトちゃんに食べて欲しいな、って思ってたん。

まだ出しておくから、食べたくなったら食べてな。」

フェイトの赤い目が動いて、はやてを見上げた。

瞬きもせずに見つめてくる双眸を見返して、はやては満面の笑みを浮かべてみせた。これでも食べなかったらカルカン買って来よう、とか考えながら。

：

なんとなく取っておいた中学校のジャージが、こんなところで役に立つとは思っていなかった。はやてはタンスの匂いのするジャージの袖を捲りつつ、騎士と共に戦地に臨んだ。

リビングの隅、台所の手前。段ボールの仮設ハウスに鎮座する毛布の塊に向かい、はやては静かに宣言する。

「朝ご飯は全く手をつけなかったし、全然動く気配がない。」

せやから、乱暴やけど、フェイトちゃんの毛布をひっぺがして様子をみようと思う。」

ヴィータは後頭部を搔きながら応じた。

「それ、一生消えない傷を間に生じさせるんじゃないの？」

はやてが、う、と息を呑んで言葉を止めた。隣に立つシグナムが腕を組んだまま頷いた。

「心配なのは判りますが、もう少し様子を見た方がいいのでは。あまり暴れられても、傷が開くだけだと思いませんが。」

ぐぐ、とはやてが唇を引き締める。

「捨て猫の飼い方、つてのにも放っておけて書いてあったんだろ？」

下手に触んねー方がいいんじゃないの？

昨日の今日だぜ？」

アギトが気のない様子で、宙返りをくるくるとしながら言う。ラインはアギトを鬱陶しそうに眺めながら、

「はやてちゃんはちよっとおせっかいなくらいが丁度いいんですよ。」

と、善意でもつてはやての心を抉った。ザフィーラはノーコメントだ。

「まあまあ、どちらにせよ、包帯とガーゼは取り替えてあげた方がいいし。」

もしかしたら、すんなり出て来てくれるかも知れないじゃない。」

シヤマルだけがそう言って、はやての肩を持つてくれた。けれど、すんなり出て来てくれる可能性が雀の涙程度もないことは、毛布の塊から漂ってくる張りつめた空気から明らかだった。

はやては息を大きく吸い込むと、平静さ装って毛布の山に一步近づく。ひっぺがして様子をみる、と口では言

ったけれど、最初からそうするつもりはない。使い魔で

ある彼女は言葉がわかる筈だから、ちゃんとまず言葉で伝える。

「フェイトちゃん、ご飯ぜんぜん食べへんのは、緊張してるからなんか？」

それとも、お腹とかどつかが凄く痛いん？

どつか痛いんやったら、心配やから見せて欲しいんよ。大丈夫やったら、一口で良いからご飯食べて欲しい。」
彼女は微動だにすらしなかった。はやては彼女が動くのを1分待つて、それからリビングをそちらへと向かって歩き出す。2メートルの距離に近づくと、彼女のうなり声が聞こえた。その声は今朝と比べても少し張りがあるように思える。シャア、なんていう猫らしい威嚇声に安心するなんて、ちょっと可笑しいけれど。

はやてはフェイトの前に座り込んだ。毛布は殆ど口が閉ざされていて、5センチほど開いた隙間から、赤い目が一つ底光りしていた。

「フェイトちゃん、言葉わかるやろ？」

なんでもええから、答えてくれへんかな。」

その目に語りかけて、はやては返事を待つ。瞬きすらしない、警戒心だけが覗く目。

はやてはそっと、彼女の背中へと手を伸ばした。

瞬間、金色の雷光が弾けた。

「——っ！」

強烈な音を弾けさせて、はやての手が跳ね上がる。「は

やて！」「主！」と、いくつもの声が背中の方であがるのを片手で制し、はやては前を見据えた。

焦げた毛布が蹴り飛ばされ、飛び出したフェイトが壁を背にして身構えていた。四つ足をつき、尻尾をぴんと立て、耳を張りつめて威嚇の声を上げる。その姿は猫そのもので、はやては唇を笑みに引き攣らせる。

やせ細って、髪も毛並みもぼろぼろで、それでも簡単には警戒を解かない彼女の、汚れた前髪の間から覗く鋭い眼差しがはやてを捉えていた。

「へえ、随分元気になったみたいやね。」

喉の奥から、唸る声が出る。身を低く構えた彼女を見据え、はやては殊更余裕混じりに笑って見せた。ここまです敵対心に満ちた反応が返ってくるとは思っていなかったけれど、それならそれらしく方法を変えるだけだ。

はやては笑いながら、彼女の前にさつき雷撃を受けた筈の手を翳す。その手には、一筋のかすり傷さえ無い。

「元気が有り余ってるんなら相手したげるで、子猫くんでも、死ぬ気でやってるんなら、一発で気絶させたる。」

怪我など一抹もしていない手を見せて、はやては彼女を笑い飛ばした。

「私は、あなたの為には傷つかへんから。」

彼女の周りに、数基のスフィアが展開した。床に展開した金の環状魔法陣から吹き上げる魔力が甲高い緊迫音を叩き付ける。はやてはその様を見下して、両腕を広

げて立ち上がった。

「撃ってみたら？ ほら。」

はやては鼻で軽く笑う。怖れるそぶりも警戒するそぶりも見せないで、まるで何も感じないというように、尻尾の毛を逆立てる彼女を下に見て嗤う。

一拍の呼吸。

彼女は射撃魔法を解き放った。顔と喉と胸部中央と腹部、いずれも急所を狙い、雷光は空間を切り裂く。直線軌道を突き進み、大気の壁をイオン化させてはやてを射抜く。

それを、はやては避けようとしなかった。

「紙飛行機やね、それじゃあ。」

歌うように唇に旋律を乗せたその目の前で、金色の光は弾け散った。白銀の光がはやての目の縁に閃いたのは一瞬。砕けた金の破片は、はやてに触れる間もなく空気に溶ける。

「で、フェイトちゃんは元気になったん？」

言葉で上手くいかなかったにしても、本当はもう少し穏便に済ませたかったのだけれど、とはやては頭の片隅で苦笑した。しかし、こうなってしまうえばいっそもう、取る方法は単純だった。こちらの方が強いことを見せつけた上で、危害を加えるつもりではないことを解らせる。

「それがフェイトちゃんの精一杯？」

「こんなもんなん？」

ただそれだけ。悪く顔を歪めて、はやては彼女を煽る。

刹那、彼女が床を蹴った。細い足の力を全て爆発させ、正面切ってはやてに躍りかかる。ばねになった猫の体が、3メートルをコンマで渡る。

「はやて！」

ウィータの怒鳴り声が背中中で裂けた。胸に爪を立てる腕が、はやての視界を回転させる。心臓を抉りだそうかという力が、はやてを床に叩き伏せた。鋭い彼女の眼差しが、はやてののど笛目がけて瞬く。

ぶつん、と血管が切れる音が体の中でした。

彼女がはやての喉に牙を立てた。怒りに満ちた彼女の貌が鼻が触れようかという近くにあつて、はやては樂しげに言葉を紡ぐ。

「やっぱり、子猫ちゃんやな。」

はやては腕を彼女の口にねじ込んでいた。大きくはない彼女の口では、腕の骨に邪魔されて歯は太い血管に触れることは出来ない。表面を走る血潮の一筋を傷つけただけ。彼女は腹の奥底から轟くような唸り声を響かせて、渾身の力で腕に牙を立てる。押さえつけたはやての胸を全体重で引き潰し、はやての表情を苦悶の色に変えてやろうと尾を振り上げる。

「結構元気になったんやね。」

「よかった。」

はやては穏やかに表情を崩した。彼女の目が、初めてはやてを見つめた。昂つて表情は威圧的だけれど、整つた顔立ちをしていることが判る。幼さの残る双眸の奥に、

思慮が滲むのを見た。きつと今なら、自分の言葉を受け止めてくれると、何故だかはやては確信した。こんな馬乗りになられて、もう少して仕留められようかという状態で、どうしてそう感じるのかは解らない。けれど、はやてはその感覚に従う。

本当は、涙を流して声を悲鳴に変えてしまいたいくらいに痛かった。手首には歯が深々と食い込んで血が出ていて、もう肉が食いちぎられてしまうんじゃないかって怖い。本当は全力で彼女を振り払ってしまいたい。

「怒らせてごめんな。」

でも、毛布の外側やと、フェイトちゃんが元気なのかぐったりしてるのか、いまいちようわからへんから。」

はやては空いている手を伸ばし、彼女の頭を撫でた。二つの耳が生える、小さな頭を。荒れた髪はべたべたと手触りが悪く、見た目にも汚れている。けれど、それでも彼女に触れられたことが少し嬉しかった。だから、はやては心の底から素直に言う。

「元気な所みせてくれて、ありがと、フェイトちゃん。」
彼女が傷ついたように目を見開いた。

唸り声が擦れ、耳が徐々に垂れていく。困ったように何度もくるくると向きを変え、次第に伏せられる。高々と振り上げられていた尻尾が、途中で折れた。

そして、フェイトははやての腕から、そっと口を放した。

手首にはくつきり歯形が出来て、涎まみれの傷口からは血が出ていた。思いつきり噛み付きやがって、と腹の底をちよつと煮えくり返らせつつ、はやては掌で血を拭う。

「お腹の具合みたいんだけど、フェイトちゃん自分で服脱げる？」

未だ警戒した様子で耳をぴんと立てるフェイトは、そう話しかけるシャマルを疑わしげに見上げていた。

もう唸り声も上げないし、魔法を発動させたりもしない。けれど、何処まで信用していいかはまだ計りかねているようだった。尻尾がまだ膨らんでいる。

けれど、あれほどの攻撃性を見せた後と考えれば上出来だろう。むしろ、あんなまるでゴミみたいに捨てられていたことを思えば、出来過ぎと言っつていいか知れない。使い魔だからこちらの言葉を理解している。だが使い魔だからこそ、自分に何が起こったのかを理解している筈だった。

契約を失効させないまま、あの雨の中放っておいたというのはつまり、苦しんで消えろということだ。徐々に精神も力もすり減らし、長い時間掛けて苦しんで死ぬと普通の猫よりも体力がある分、長い時間を掛けて。どん

な契約をしていたのかは知らないが、失効させるならば、せめてすぐにしてやればいいものを。

「いいったあ！」

不意に手首を襲った刺激に、はやては思わず悲鳴をあげた。咄嗟に振り返ると、仏頂面のヴィータが消毒液をはやての手につけていた。

「あ、ごめん、ヴィータ。」

惘然とした様子のヴィータにはやては反射的に謝った。だが、ヴィータは一言もしやべらなかつた。ひたすら無言で手首の噛み傷にガーゼを当て、包帯を巻いてくれる。

「フェイトちゃん、大丈夫だから、ね？」

落ち着いて。」

シヤマルは慌てて、フェイトの肩に手を置いた。

フェイトが鋭い目つきをはやてに向けて、毛を逆立てていた。細かく動く黒い耳ではやてのことを探り、警戒心を撒き散らす。今の悲鳴で、どうやら驚かせてしまったらしかった。はやては冷たい汗が背中を流れるのを感じつつ、努めて平静を装った。

「ちよつと消毒液が染みただけやから大丈夫やで。」

それに、フェイトちゃんにはこんな染みるもん使わへんから、そのお姉さんの言うことちよつと聞いたつてや。」

そうして、無事な左手をひらひらと振ってみせる。フェイトは訝しげにはやてを凝視していたけれど、シヤマ

ルが再び声をかけるとそちらを振り仰いだ。

「怪我がどうなってるか診るだけだから、ね？」

シヤマルは精一杯やさしいお姉さんの眼差しを向けた。フェイトは真偽を探るようにシヤマルへと焦点を合わせた。その見つめ方はあまりに熱くて、シヤマルの額は焦げそうだった。尻尾がちらちらと揺れている。

「ちよつと服を捲っていいかしら。」

フェイトは皆の顔をちら、つと一瞥して、それから二本の足で立ち上がった。

「自分で脱げるよ。」

それが、フェイトが初めてしゃべった言葉だった。

綺麗な声をしている。高いけれど落ち着いた印象のある、澄んだ声だ。

はやてのお古であるパジャマのボタンを一つずつ外して、お腹の辺りを小さく開いていく。あんまり注目しているのがばれないようにとはやては顔を背けつつ、横目でフェイトの様子を窺った。

随分と痩せた体だった。

歳の頃を人間にして十歳前後と思ったのは、このあまりに細い体のせいだろう。立ち上がってみれば、背ははやてより5、6センチ低い程度だ。実際には、十三、十四歳くらいと思っていなのだろう。だが胸すらろくに膨らみもせずに浮いたあばらと、包帯を巻いた上でも判る程にへこんだ腹が彼女を幼く見せていた。

「ありがとう、座ってくれて良いわ。」

「包帯を取るからね。」

「シヤマルは努めて冷静に言葉を滑らせるが、はやてにそれは無理そうだった。お腹以外の傷はちゃんと綺麗に塞がっているようだが、服の間からは他にも肌に残る青黒い痕が見えていた。細い体を埋めようかというくらいに、古い痕も新しい痕も体中を走っている。シヤマルが包帯を解く音が耳に障る。」

「ちよつと血が滲んでるわね。」

「暴れたせいかしら。痛む？」

「腹に当たったガーゼに触れながら問うと、フェイトは耳を倒した。そうして、細い声で頷く。なんと言ったかも判らない程の小さな声だったけれど、確かに痛いと感じた気がした。」

「そう、それは大変。」

「全然大変じゃなさそうに言いながら、シヤマルはガーゼを剥がした。生乾きの傷口を弄られる感触が嫌なのだろう、フェイトが小さく鳴いた。それは本当に、子猫みたいな音だった。」

「ガーゼの下から現れた、昨日は中身まで見えていたというお腹の傷。右の脇腹からへその上に掛けて、斜めに破れたそこには、赤い線が幾筋も刻まれている。そのうちの一つから血が滲んでいた。でも、見た感じもフェイトの動きからも、傷はもう表面だけと判る。」

「ん、結構治りは良いわね。」

「シヤマルは微かに目元を綻ばせると、口元に人差し指

を立てて囁く。

「じゃあ、傷が痛くなくなるおまじない、かけてあげる。」

「シヤマルの手の中で、淡い光が灯る。それは正三角形の軌跡を描いて、フェイトを包んだ。フェイトは緊張に身を強ばらせたが、光が柔らかく自分の傷口を包むと気を解いた。治癒魔法に抱かれて、フェイトはお尻を床に着けて座り込む。黒い尻尾がフローリングに寝転がった。」

○

「おまじないのお陰で包帯も取れたことやし、一緒にお風呂入ろうか、フェイトちゃん！」

「なるべくナチュラルにほがらかに、はやてはフェイトの手を取った。フェイトは丸い目をさらに丸くして、はやてを見上げる。」

「さっぱりしてからご飯食べたいやろ？」

「はやてはおばかさんで可愛い家族の嫉妬の視線からフェイトを背中で守りつつ、握り拳を作ったままのフェイトの手を包み込む。ようやく毛布から出て来てくれたからといって、ここぞとばかりにやりたいことをやろうとするのは急ぎ過ぎかな、という気はするが、黒ずんだ血に塗れ、乾いた泥をぼろぼろと落とすフェイトを見て

いるのはそろそろ我慢の限界だった。それにアギトの言うように、やっぱりだいぶ嫌な臭いがする。

「な、どう？」

髪の毛も洗ってあげるし、はやてちゃんが乾かしてあげるで。」

はやてはフェイトの目を見つめて、振り解かれないうにお願いながらフェイトの手を撫でる。フェイトの手は、この年頃とは思えないくらいに荒れていた。フェイトがはやての手を見て、それから包帯が巻かれた手首を見た。耳が前後左右にと動き、尻尾が振り子のように床すれすれで揺れている。

「濡れるの、嫌い。」

フェイトがぼそつと呟いた。

猫なんだから当然か、とはやては納得したけれど、これだけ汚れているのに一般の猫と同じように舐めてどうにかする、というのは、待っている方からすると気が遠くなりそうだった。しかも、ゴミの山に突っ込んでいた体を舐めて綺麗にするなんて、聞いただけでも病気になりそうだ。

だが、はやてのことを振り解かず、ましてや返事をしてくれらないうことは、それなりに意思疎通をしようという気になってくれたということだ。まったく警戒がなくなっているというわけではもちろんないが、一抹の信用は勝ち得たと考えて間違いはないだろう。だから、上手く行けば、このままの流れでお風呂に入れられる筈だ。

はやてはそんな内心を悟られないように気をつけながら、フェイトの顔を覗き込む。

「顔、あんまり濡れないようにしてあげるから、な？」

「体もぼかぼかになるし、すっごく気持ちいいで。」

フェイトが顔を上げて、はやてを見据えた。

何を考えているのか判らない、まるで透明な眼差しをしていた。錆のように血を頬につけ、泥の色をした髪に包まれて、その双眸だけは傷一つない硝子玉だった。赤に輝くアモルファスの瞳。その硝子玉のような目が、はやての奥までを透かそうとしている。深くはやての胸の奥に突き立てるように。起立する耳と尻尾すら動かさず、フェイトははやてを見ていた。

はやては微笑む。

「お風呂入ってから、ご飯食べよう。」

私の料理、めっちゃおいしいんやから、な？」

まっすぐに笑い掛けると、フェイトは耳を微かに伏せた。

∴

八神家のお風呂は優秀だから、湧かし始めて10分が入れるようになる。はやては外で干していたフカフカのバスタオルを二枚取り込んで脱衣所に畳んでおいた。フェイトの分の着替えには、はやてが前に着ていたTシャツとハーフパンツを用意した。下着は今、シグナムに飼

いに行つてもらつてゐるけれど。一応これで、自分の着替えの用意もすれば、お風呂に入る準備は万全だ。

はやては浴室の扉の前で腰に手を当てる時、

「よし、」

と気合いを一発入れて、洗濯機の方を振り返つた。引つ越して来てから長く使つてゐる洗濯機に、今日は黒い猫の耳が生えていた。小刻みに動いて、こちらの動向を探る三角耳はもちろん、フェイトの耳だ。どうやら、フェイトは洗濯機の陰に隠れてゐるつもりらしい。けれど、はやてより5センチくらい低いだけの体は悲しいかな、頭隠して耳隠さず。

「フェイトちゃん、お風呂入るで。」

ほら、出といでー。」

はやては両手で手招きをする。しかし、フェイトは隠れたまま耳をくるくると動かすばかりで、一向に出てくる気配がない。細いぼそぼその尻尾だけが妙に活発に、まるで別の生き物のようにのたくつてゐる。

「お風呂入る、つて言つたやんなあ？」

もうお風呂も溜まつとるし、せつかくここまで来たんやから入ろう？

汚れてるの落としたらすつきりして気持ちええよ。」

フェイトの耳がはやてを捉えて止まつた。それから、ゆるやかに垂れて止まる。そうして、フェイトは洗濯機の裏から出て来た。

「ん、ええ子やね。」

はやてはフェイトが逃げ帰らないうちにさつさと捕まえると、かがみ込んでフェイトと目を合わせた。

フェイトの目は、静かな湖面のように凷いでいた。諦めも少し滲んでいたけれど。

「よし、じゃあ、はやてちゃんが脱がせたるからな！お風呂にはいつて、早いとききれいになつちやおうな！」

言うが早いのか、はやてはフェイトが着るパジャマのボタンを外し始めた。フェイトはされるがまま、絶望の漂う顔で俯いてゐた。はやてはしれつとそれに気付かない振りをして、上からボタンを一つずつ外す。

先程、リビングで見た通り、フェイトの体には幾筋もの傷が走つた痕が刻まれていた。シャルが掛けた魔法は、魔法生命体を維持する魔力の再結合を促すものだ。だから、深い傷を負つた名残は消えない。

だが、契約者は別だ。契約者なら、傷など跡形も無く消すことが出来る。でも、この子には、それだけのものすら注がれてゐない。契約者がこの子を戦いに投じたくせに。契約者がこの子の生き方を変えたくせに。契約者が、この子を使い魔にした癖に。この子を、あそこで死ぬと捨てたんだ。

「はやて？」

フェイトがはやての顔を覗き込んだ。視界に割つて入つた幼い顔に、はやては自分が手を止めていたことに気付いた。

「あ、ごめんなあ。

目を開けたまま寝とったわ。」

次のボタンに手を掛けた時、胸元にある硬い感触に手が触れた。ボタンを外してみると、それは錆びた金属のプレートだった。黒ずんだ鎖に通されフェイトが首に掛けるそれは、最初の日、はやてがフェイトという名前を知ることになったタグだった。はやては上着を脱がしてやりながら、フェイトを振り仰ぐ。

「それ、貰ったん？」

問うと、フェイトの耳が跳ねた。

尻尾も振り上げて、彼女が仄かに笑う。

「うん、マスターに貰ったんだ。」

首に掛けたプレートはただの鉄のようだった。端は腐食して欠け始めている。濡らすことは避けなければならぬ。はやてはそれを取ろうとは言わなかった。それを取ろうとは、言えなかった。

：

服を脱がせるとフェイトは本当にやせっぽちで、肌はまばらに色が変わり、髪も泥に塗れて、耳も尻尾も辛うじて元は黒かったことが判る程度だった。これではそこらへんのネズミの方が綺麗なくらいだろう。はやてはそれを実感して、そして、だからこそ、ここから始めようと思う。

自分達の関係を、改めてここから始めよう。

「よし、お風呂入るで！」

浴室の扉を開けて、はやてはフェイトを中に入れた。フェイトは嫌そうに耳を伏せていたけれど、ここまで来たからにはと観念した足取りで風呂場に足を踏み入れる。浴槽には昼の光を受けて薄青いお湯が湯気をあげていて、浴室を暖めてくれている。洗い場の中央に来た所ではやてが浴室の扉を閉めると、フェイトは怯えたように肩を跳ねさせた。

「誰も取って食べるわけやあらへんから、安心しい、つて。それに、はやてちゃんは髪の毛洗うの上手なんやでー。」

ジャージの袖をまくり上げて、はやてはシャワーを出す。床を撃つて弾ける水の音に、フェイトは無くなってしまうんじゃないかというくらいに耳を倒し、尻尾を自分の足に絡み付かせた。

はやてはそんな様子に、シャワーの温度を少しぬるめに設定し直すと、満開の笑顔でフェイトの腕を掴んだ。怯えているフェイトが悲しそうな目をしたけれど、腕の力は緩めない。

「とりあえず、一回全部流そっか。」

ここまで来たなら、絶対逃がさない。洗濯機で洗うよりも完璧に綺麗にしてやる。湿気を帯びてちよつと勢いを増した嫌な臭いに、はやては固い決意を抱いていた。「まず顔を洗おうな。」

そしたら、濡れないようにタオルを顔に当てて置いてええから。

はい、息止めて目を閉じるんやでー。」

はやてはシャワーの勢いを少し抑えて、フェイトを後ろから抱えた。ひゅんひゅん、というフェイトの鳴き声には、さわやかにシカトをぶっこいて顔にお湯を掛ける。湯の中に手を突っ込んでフェイトのおでこを擦ると、こびり付いた汚れの為かぬるぬるとした感触を覚えた。どうやら、流しておしまいという訳にはやはりいきそうもないらしい。フェイトは嫌そうな声を出すばかりで抵抗はしないから、はやては遠慮なく眉毛も頬も鼻も顎も手で触って汚れを落として行く。

「よし、こんなもんかな。」

はいタオル。」

指先に違和感を覚えなくなった所で、フェイトの顔にタオルを当ててやる。するとフェイトは、大慌てでタオルを握って自分で顔を拭きだした。

「さっぱりしたやろー？」

喜色満面ではやてが覗き込むと、フェイトはタオルの間から右目を覗かせた。

眉の色は金色だった。睫の色もそう、金に輝いている。真紅の澄んだ瞳に掛かる睫の淡い影が、光を編んでいるようだった。

「美人さんやね。」

告げると、フェイトがタオルの中に顔を隠した。そんな

な仕草が妙に可愛くて、はやての唇は自然と解れる。

「よし、じゃあ次は頭を一回流すからな。」

ちゃんとタオルで顔を隠しておくんやで。」

シャワーの量を多くして、はやてはフェイトの頭の天辺からお湯を掛けた。

「ひゅ・・・。」

フェイトがまたも悲しそうな悲鳴をあげるけれど、千尋の谷に子を突き落とす獅子の気持ちではやては容赦なくフェイトの頭をシャワーという名の滝壺に落とした。シャワーヘッドから溢れたお湯は、頭を通って背中を流れる頃には色が変わる。随分汚れを溜め込んだものだ、なんて変な感慨を抱きつつ、はやては手でフェイトの髪を梳く。爪を立てないように、指の腹で頭を軽く搔いてやるようにすると、フェイトの嫌そうな声が止まった。

...

尻尾が頼りなく足に張り付いているのに気付きつつ、はやては髪を片手で持ち上げて背中を流してやる。髪の後には石けんで洗うけれど、これだけ肌が汚れていると髪の毛を洗ったのが無駄になりそうだからだ。

「フェイトちゃん、傷には染みない？」

大丈夫？」

青黒い傷の上を流れるお湯を気にすると、フェイトは

首を振った。

「大丈夫。」

はやてはそれを聞いて安心すると、足先まで一度流してから、フェイトをお風呂椅子の上に座らせた。椅子からはみ出した尻尾が、によるっと立ち上がる。

「あ、そういうえはまだ尻尾流してなかったな。」

「ちょお触るで。」

竹箒みたいに荒れた尻尾を掴む。手触りは使い古した雑巾みたいだった。尻尾が嫌がってはやての手の中ではたばた暴れるけれど、はやてはおかまいなしにシャワーを掛ける。あとでシャンプーで洗おう、と思いつながら、根元のお尻の方から順に、毛の中に埋まっている謎の塊や油っぽいものを取り払う。

「ん、やっぱり黒猫さんなんやね、フェイトちゃんは。」
一通り流し終えた尻尾は、混じりけの無い綺麗な黒をしていた。ひとまずそれに満足すると、はやてはシャンプーを取って手の中で泡立てる。

「じゃあ、髪の毛と耳、洗っちゃおうな。」

フェイトがタオルの隙間から、少し不安げな目ではやてを見上げた。はやては安心させるように見つめ返してあげると、フェイトの前髪を掻きあげた。再びフェイトはタオルで顔を覆い、耳を伏せる。

「シャンプー行くで。」

声を掛けて、はやてはフェイトの髪にシャンプーを付けた。指の腹で頭を擦ってやりながら泡を立てる。しか

し、いつもなら威勢良く立つ筈の泡は随分と控えめな自己主張しかしなかった。茶色っぽい髪の中に埋もれてしまい、楽しいお風呂の絵を作り出してくれない。二回は洗うことを覚悟していたけれど、二回で済むようには間屋が卸してくれなさそうだった。はやては覚悟を決めて、長い髪の毛先までシャンプーを付けていく。

「流してから、また洗いたいんやけどええよね？」

頭で困ったようにしおれている耳を指で搔いてやりながら、はやてはフェイトに伺いを立てる。嫌だと言われても春風のように受け流して洗うつもりだったけれど。

中々返って来ないフェイトの回答を待つ間に、黒い耳は泡まみれの真つ白耳に変わった。フェイトは唸り声を出したまま、中々意味ある言葉を返さない。だからはやては問答無用で髪を流し始める。泡を流し、汚れを落とすと髪の色が変わる。さつき見た睫と同じ、彼女は艶やかな金髪をしていた。

「フェイトちゃん、もっかい洗うけど、ええよね？」

答えが無いのをいいことに、もう二回目の準備とばかりにシャンプーを手で泡立てながら尋ねると、それまで寝っぱなしだった耳がぴこんと上がった。

「・・・いいよ。」

小さな声。

二回目のシャンプーは、さわやかな花の匂いがした。

：

「フェイトちゃん、せつかくやからお風呂一緒に浸かろうよ、な？」

湯船に肩までつかりつつ、はやてが両腕を広げて浴室の隅で棒立ちをしているフェイトを呼んだ。結局3回シヤンプーして、トリートメントも大切に使用している高い奴を念入りにしてあげて、体だつてそれは丁寧に洗つてやった。爪の垢だつて綺麗にしてあげたし、指の間だつて洗い忘れていない。膝の裏だつて完璧だ。

おかげでフェイトちゃんは洗濯機で洗われた方がマシ、と思つてるかもしれないけど、なんてはやても内心で自覚している。でも、それはそれ。いつか獅子の子も、千尋の谷から突き落とした親の気持ちを理解してくれるようになる、筈。

「ほーら、気持ちええよ。

昨日は寒かつたし、あつたまろうつて。な？ な？」

洗ったら本当に真っ黒になつた耳と尻尾もはやての方に向け、フェイトは瞳の表面に、あざやかな昼の光とはやてのことを映した。フェイトはよく人の目を見る子だつた。それが、はやてに對する不信によるものなのか、フェイトの性格の現れなのか、どちらなのかは判らない。ただ、もし琴線に触れれば、この場ででも彼女は持つているものを爆発させるだろうとは判る。彼女の魔力資質は雷撃変換。お風呂の中でやられたら、流石に無傷では

済まないかもしれない。

けれど、いちいちビビつていても仕方ないから、はやてはフェイトを呼ぶ。

「フェイトちゃん、早う入ろうよー。」

そこおつても寒いだけやろー？」

フェイトの尻尾の先が3センチだけ上がる。目を右の方に逸らして、左耳だけを立てて、少し逡巡。それからフェイトは困つたような顔をして、

「ちよつとだけだよ。」

と、はやてのところによつて来た。

「やつたー！」

歓声をはやてが上げると、湯船に足をつけようとしながら、フェイトがはやてを窺つた。

フェイトの肩の後ろには採光用の曇りガラスがある。窓の外に植わっている木の葉が零す緑の色が散つている。逆光に縁取られ、金色の髪が滑らかに輝いた。淡く陰の掛かる面差しの中で、赤い瞳が微かにはやてを映して伏せられる。肌は白く綺麗で、頭にある黒い猫の耳とお尻で揺れる黒い尻尾が妙にそれに似合つていた。はやてはこの子の傷を早く治してやりたいと思う。

ちいさな水音を立てて、フェイトがお湯の中に入る。髪が長いからとタオルで頭の上に纏めようとしたら、耳が隠れるのが嫌だと言われたから背中に広げさせていたけれど、流石にお風呂の中に堂々といれるのはよくない。

「ん、ちよつとええかな。」

はやてはせめてもと、髪の毛を首の周りに巻かせた。自前のマフラーみたいでなんだか可笑しいけれど、しないよりはマシだろう。

「ありがとう。」

フェイトがはやてに小さく笑い掛けた。

「え、あ・・・うん、どういたしまして。」

不意打ちの笑顔に、はやては何故だかどもった。けれど、フェイトはとくに気にしていないようで、湯船につかると耳をばたんと倒す。お湯の中では黒い尻尾がコンブの友達みたいに揺らめいている。やつぱりちよつとほつとしたのだろうか、フェイトの横顔から少し緊張が薄らいだように見えて、はやては目を細めた。

○

今朝までの定位置だった仮設段ボールハウスは「汚いから片付けた。」と、お風呂上がってそうそうアギトに宣言された。最初に場所決めてあげるのがいんじやなかつたつけ、と昨日検索した拾い猫の飼い方を思い出しつつ冷や汗を掻いたはやてだったけれど、フェイトの様子を見るかぎり、それなりには大丈夫そうだった。フェイトは部屋の隅、台所とは反対側、リビングの一番窓際

で丸まっていた。

「昨日、掃除しておいてよかったですね。」

シグナムが食器を食卓に並べながら言う。はやてはしきりに頷き返しながら、テレビの後ろという、恐ろしく埃が溜まる所にお風呂上がりのくせに挟まるフェイトを眺めた。フェイトはバスタオルを頭から被って、時折顔を埋めている。おそらく、干したばかりのお日様の匂いが気に入ったのだろう、最初にタオルを渡したとき、顔を埋めてしばらく静かにしていた。

「はやてー、お昼ごはんなにー？」

ヴィータが二階から下りて来て尋ねると、はやてはフェイトを注視したまま、わざと大きな声で言った。

「お魚ー！」

アジの開きやで。」

フェイトの耳が、タオルの上からでも判るくらいに勢い良く立ち上がった。

こいつは絶対に、食卓につかせることができる。そう内心でほくそ笑んで、はやては包丁を握り直した。

：

「さ、ご飯の用意できたでー。」

フェイトちゃんも食べようー！！」

やきたてのアジの開きは七枚。

『じゃんけんぽん！』

リインとアギトは小さいから二人で一枚。

『あいこでしょ!』

だから、どっちが骨がある側と無い側を食べるかいつもじゃんけんをしている。

二人とも闘争心剥き出しで自分の融合騎としての能力をフル活用してじゃんけんしているために、

『しょ!』

決着がつくまでが長い。

『しょ!』

そんな見慣れた風景は放っておいて、はやては窓の外を眺めて座っているフェイトを呼んだ。しかしフェイトはタオルを頭から被ったまま、S字に尻尾をカーブさせて、ちら、つとはやての方を窺うばかりだった。

「昨日からなんも食べてなくてお腹空いたやろ?」

フェイトちゃんの分も用意したから、一緒に食べよう。

今日はアジの開きやで、いい匂いするやろー。」

ダイニングテーブルでは全員が席に着いていて、ザフイラは椅子の下でクールな顔をしながら尻尾を振っている。昨日の今日で、一気に一緒に食卓でご飯は急ぎ過ぎではないか、という声が耳の裏辺りから聞こえる気はするけれど、もう既に一緒にお風呂に入る所まで行ったんだから、いっそ強引すぎてもいいじゃない、とはやては理性的な声を一蹴する。エプロンをソファに放り投げ、はやてはフェイトの隣に膝をついた。

「フェイトちゃん、ご飯食べよう。」

すぐ傍で声をかけると、フェイトがはやての方を向いた。タオルから覗く前髪は乾いていて、ぴんと数本が上に跳ねている。

「この家って、外から魔法とかで覗かれないように、境界とか張ってるの?」

フェイトが自ら進んで発したのは、そんな問いだった。うん、防犯の為に一応張ってるよ。

でもこっちから念話とかを飛ばすのは、そんなに難しくあらへんよ。特に、この窓際の辺りは、家の中でも一番通じやすくしてある。」

それを訊くと、フェイトは耳を俯けた。

「そうなんだ。」

何故フェイトがそんなことを訊いたのか、はやてには判っていた。二人のやりとりを遠く眺めている他の面々にも解っているだろう。フェイトは契約者に念話をずつと送っていたのだ。もつと正確に言うなら、念話に応じようコールを続けていたのだ。本当はここにいるみんなが気付いている、でも気付かない振りをしていた。

「なんで、出てくれないんだろう。」

フェイトが擦れた呟きを漏らした。

ひとつ、はやてには解ったことがある。それは、私、やっぱりもう帰らなくちゃ。

マスターに何かあったかもしれない。」

自分が捨てられたことを理解していないということだ。怪我がちよつと酷かったせいで、たまたま家に戻れなく

なっただけだと思っっている。はやてが通りがけの怪我人を介抱してくれた優しい人だと思っっている。そしてなにより、

「マスター、心配すると思うし。」

契約者はまだ、自分のことを好いてると思っっている。

「私、帰るよ。」

はやては、なんと答えてやることも出来なかった。十三の子供の、何も知らない眼差しに、何を言えたいのか解らない。昨日からずっと、帰りたいと言いつい出されるとき、なんと答えるべきか考え続けていたのに。それなのに、かけてやるべき言葉が見つからない。

「マスターの名前とか連絡先は覚えとる？」

優しい振りしか出来ない。

「・・・わかんないんだ。マスターとしか、呼んでなかったから。」

だから、私・・・、マスターのこと心配なんだ。」

心細そうにゆらゆらと唇を動かし、フェイトは頼りなく呟く。右手がぎゅつと、服越しに首に掛かるプレートを握り締めた。襟首に掛かる錆びた鎖が僅かに見える。

本当に、はやてはまだ、彼女に本当のことを教えたくなかった。先送りにするだけだっただけで知ってる。知った後で、この嘘に傷つくのは自分ではなくて、彼女の方だっただけで知ってる。知っていて、はやては嘘を吐く。

「私な、管理局ついでというところで働いとって、他の人よりもちよこーっとだけ偉いんですよ。」

せやから、私が後で調べて、マスターに連絡しといてあげる。」

嘘だ。

使い魔を作るのに申請は要らないから、彼女の契約者など簡単には調べられない。例え見つかったても、フェイトは元気ですからなんて言えない。言えるのはただ一つ。まだ、彼女の命まで捨てないで。それだけだ。

「え、でも・・・。」

フェイトが眉を垂らす。はやてはそれ以上何か聞く前に、自分の言葉を畳み掛けた。

「それに、フェイトちゃんの話が通じんのは、フェイトちゃんが元気じゃないからちゃうん？」

せやったら、ご飯を早う食べて元気になつてから、ちやんと安全に帰つたらええやん。

その方が、マスターも心配せえへんよ。」

待つてなんか、本当はいないのに。

心配なんて、本当はしてないのに。

それでもその嘘に、フェイトは何も気付かずに乗り返んだ。

「そうだよ、あんまりマスターを心配させちゃ、ダメだよ。」

はやてはとびきり優しく、虚構の笑みを作り上げた。 「ん、じゃあ、一緒に席について、ご飯食べよう。」

「しぶったわりに、良い食べっぷりでしたね。」

シヤマルが食器を洗いながら、忍び笑いを零す。

「アジの開きが真ん中のぶっとい骨しか残らへんかったな。いじっぱりな奴やねえ。」

噂をされている本人は窓際にべったりと座っている。みんながテレビをつけてみているから、今度はその反対側でソファアの隙間に挟まっていて、肘掛けの上から耳だけが覗いていた。好き勝手に耳を動かして、いろいろ観察しているらしい。

「しゃべってるの、聞こえてたりして。」

はやてがシヤマルに軽くシヨルダータツクルをする
と、シヤマルが可笑しそうに目を細めた。

「いいと思いますよ。」

これだけ食べてもらえてうれしい、って話でしよう？

肩越しにフェイトを見ると、ピンとしていた耳がへこたれて、ソファアの影から見えなくなっていた。

○

ヴィータがアスファルトに転がっていた石を蹴った。
「はやて、あんなすぐバレる嘘、どうすんだよ。」

ああ、来た、とはやては胸の淵で思った。

歪なその石が不規則に跳ねて街路樹の下草に埋まる。無機質な音が妙に耳に響いて、はやては顔を顰める。訊かれるだろうと覚悟はしていた。おつかいになって普段はついて来たがらないヴィータと一緒に、それも二人で行こうと言いだしたときから、はやては腹を括っていた。それでも、口は重たかった。

「あんな嘘、吐くべきじゃなかった、っていうんは、判
ってる。」

けど、あのまま帰す訳にはいかへんかったから。」
4時にほど近い日差しの色は、少しずつ変わり始めている。

はやては料理酒のボトルを手の中で転がす。お昼の時、買って来てもらい忘れたたった一つ。ヴィータにはやてを責めようという気はない。ヴィータだって、フェイトにどういって良いかなんてわからない。せめて、もう少し体だけでも元気になってからと、確かに思う。

「でも、一方的に向こうから、今すぐ契約が切られる、
って可能性はあるんだろ。」

いっそ、一緒について行っちゃった方が良かったんじゃないのか。」

はやては料理酒を両腕で抱えた。1リットルボトルの重さが腕にのしかかる。

「切るんやったら、きつともうとつくに切つとるよ。
フェイトちゃんが念話を送り続けていることにも、出

力を上げたことにも気付かへん筈ないから。」

その気になれば、何処に向かつて飛ばしているかはわからなくても、どの程度の強さで念話を送っているかを探知することは出来る。例え二つ世界を渡った先だとしても、あの力なら届くだろう。彼女は声なく大声をあげているのだ。他の誰にも聞こえない声を、聞いてくれないただ一人の為に放ち続けている。

「あんまり詳しくないんやけど、使い魔の契約の仕方って何パターンかあるらしいな。」

契約者の力量にも依るらしいけど、遠隔やと使い魔が破壊される以外では契約抹消が出来ないとかなんとか。」

ヴィータは眉根を寄せて、小難しい表情をした。はやてもはやてで、使い魔の技術のことはよくわからないから、どうにも詳しく説明はしきれない。ザフィーラはベルカ式の守護獣であるし、はやてが彼を守護獣としたわけでもないからだ。そもそも使い魔や守護獣を作るなんて難しい魔法は使える人の方が少ないのだけれど。

「じゃあ、ひとまずは、あいつは消えないって思っているんだな。」

神妙な面持ちで、ヴィータがはやてを仰いだ。

はやてははつきりと頷いて見せた。

「うん、大丈夫やと思う。」

せやから、ちよつと安心やね。」

それに、そう遠くないうちに、契約者さんの顔を拝み

に行くつもりもあるから。」

はやては料理酒を軽く手の中で跳ねさせた。緑色のボトルの中で、透明な液体が音を立てて揺れる。

「え、そうなのか？」

不思議そうに目を丸めるヴィータに、はやてはうんと軽く答える。

「あんまりメジャーな技術やないけど、使い魔の契約を引き継ぐっていうんがあるんよ。それをするには、現行の契約者と会わんとならへんからな。会うよ。」

そっか、と呟いたヴィータが道の先を見る。少し横顔が明るい。はやてはヴィータの頭をくしゃくしゃと撫でると、料理酒で自分の肩を叩く。

「契約者さんが、うん、つて言うてくれれば、引き継ぎ事態は使い魔を作るのよりは簡単や。ただ、契約者さんがそんなことしてくれるかどうかは怪しいんやけどね。」

通りの先に、切れかかった街灯が見える。まだ点いてはいないけれど、プラスチックのカバーがそこだけ茶色く焦げているから、遠目に見てもよくわかった。あの街灯を通り過ぎて一個目の角を曲がれば、四件目に我が家が見えるはずだ。リビングの南向きの窓の前には、恐らく今も彼女が座っているのだろう。

「フェイトちゃん、やからな。」

はやては独り言を零して、まだ青い空を見上げた。

頬を風が吹き抜けて行く。

木々とお日様の匂いがする風。

「それをどうにか出来るようになるまでは、
まだ私もフェイトちゃんも、マスターには会うわけに
はいかへんねや。」

家まではもうあと5分。ヴィータが空いているはやて
の手を握り締めた。

○

春が終わり、夏へと向かう前の時期。

外は六時を回ってもまだ明るかった。青から緩やかに
ブルーに変わり、西の空が淡い蜂蜜色に溶ける時。窓際
に座り込む彼女の金髪が仄かに暖かい色に染まる。

「フェイトちゃん、今日、どこで寝る？」

黒い耳の作る影がその上に伸びていた。はやては驚か
せないように少し遠くから声を掛ける。彼女は耳だけを
振り向かせた。窓を向く彼女の背中が、淡く光に吞まれ
ている。

「ほら、昨日居て貰った毛布はもう使い物にならへんし、
いつまでも台所で寝かせとけないやん？」

シグナムとシャルは二階で干していた布団を取り
込みに行き、ヴィータとザフィーラはラインと散歩に、
アギトは部屋で昼寝をすと言っていた。

だから、庭の方から布団を叩く乾いた音が響くだけの
リビングに、今は、はやてとフェイトの二人だけしか居
なかつた。はやては意識して足音を立て、フェイトの隣
に歩み寄る。日差しのぬくもりが残る床は、裸足で歩い
ても暖かかつた。

「まあ、うち、家族多いから誰かと一緒に部屋になっち
やうんやけど。私と一緒に部屋で寝るとかどうかな？」

フェイトが眺める西の空をはやても見上げた。庭の
木々も扉も、向かいの家も、遠景に霞むビルの群れも、
だんだんと青い影に吞まれて行く。やがて来る夜の気配
がする。遠く手を伸ばしても届かない空で、薄い雲が黄
金に輝いている。

「私、帰るよ。」

フェイトが、その黄金の世界を見つめて紡いだ。

赤い瞳の奥で、消え行く太陽と共に空が作る世界が輝
いている。澄んだ横顔に、西日のオレンジが焦げ付いて
いた。

「手当てしてくれてありがとう。」

フェイトはそうして、淀みの無い仕草で立ち上がった。
金の髪に夕日が燃えている。それよりも熱い赤の目に
はやてが映っている。その瞳に、はやては自分の姿が滑
るのを見た。

「今日ほうちに泊まっていくんやろ？」

それに、今日だけやなくて、もつとうちでゆつくりし
てってええんよ。マスターには私が必ず連絡するから、

元気になるまでいなよ。」

はやてが居るのは、

「はやては、優しいね。」

彼女の瞳の表面だった。

「ごめんね、今朝は噛んだりして。

心配してくれてたのに。」

フェイトはそう口ずさみながら、はやての右手を取った。手首に巻かれた包帯が窓から差し込む光で茜に染ま

る。

「子猫に噛まれたくらいじゃ、全然痛くあらへんから。

気にせんで、ええよ。」

はやては何故か、そんな口を利いていた。言いたいの
はそんなことではないのに。引き止める言葉を言いたいの
に、喉で詰まって出て来ない。

「それでも、ごめんね。」

真摯な双眸が、はやての言葉を撃ち殺して行く。

「私のこと見つけてくれたのが、はやてで良かったって
思うよ。」

フェイトははやての手を顔に近づけて目を閉じた。黒
い三角の耳はぴんと張っている。尻尾は悠然と伸びて、
床に影を放つ。夕日と影の間で目を伏せるその姿は、焼
き付くように目が眩んだ。あんな雨の路地で、油に塗れ
て、ゴミ溜めの中で、内蔵さえ雨に晒して倒れていた姿
はそこにはない。

「なんか、急におしやべりに、なったんね。」

振り絞って出て来た言葉が馬鹿馬鹿しくて、泣きたか
った。

「ちゃんとお礼を言わなきゃいけない、って思ったから。

ありがとう、はやて。」

フェイトが手を離した。

どうして、昨日初めて会ったばかりの彼女のことを、
こんなにも引き止めたのか。本当はそんなに、立派な
理由じゃない。本当の理由を、彼女に今、聞かせる勇気
なんて無い。優しい振りをしているだけだ、ってことを
解っている。だから、

「本当に、帰るん？」

引き止めることが出来ない。彼女の優しげな眼差しを遮
ることが出来ない。

「うん、マスターが待ってるから。」

待つてなんかないよ、そんなこと言えなかった。

フェイトははやての了解を待つように、じっとはやて
を見上げていた。はやては顔を逸らすことも出来ないで、
無理矢理作り出した言い訳でフェイトに縋る。

「でも、もう暗くなるし・・・、それに、力だつて戻つ
て来てへんのに、夜道なんて危ないよ。連絡ついてから
マスターに迎えに来てもらえばいいやん。」

せやから——、

フェイトは少し困ったように、でもはやての言葉にじ

つと耳を傾けてくれていた。歳に似合わないくらいの大
人びた優しい眼差しはまるで、石瑛の硬質を帯びている。
ハーカニヤの砂漠で生まれた赤い硝子の目で、

「大丈夫だよ。私、強いから。」

フェイトは穏やかに微笑んだ。

はやてはフェイトを抱きすくめていた。

フェイトが飛び退る間もないくらいそれは咄嗟のこ
とで、はやての腕の中でフェイトが戸惑いに身を硬くす
る。細い方と腰に腕を回して、思いつきり抱きしめて、
はやては強い声を放った。

「ダメや。」

二人の体の間に入ったフェイトの右腕が、はやての胸
を押した。

「どうして、いきなり・・・。」

あばらが軋むくらい力だった。服か出ている鎖骨の辺
りをフェイトの爪が引つ掻く。妙に質量のある硬い痛さ
だった。まだ幼い爪がはやてを拒絶している。はやては
逃げられないようにもつと腰を引き寄せた。

「はやて。」

唸り声に紛れ、怒りの滲んだ声がフェイトの口から吐
き出された、あぶれている左手がはやての背を引きはが
そうと引つ張る。

「はや——っ。」

暴れるフェイトを逃がすまいと抱きしめると、フェイ

トの足が宙に浮いた。空気を掻いて、裸足の足が地面を
求める。はやてはそれでも、フェイトを腕の中に抱え込
む。頬にフェイトの首が触れた。床に二人の影が投げ出
されている。

「心配やから。」

もう少し元気になるまでここに居て。」

首元が増えて行く鋭い痛みを数えながら、はやては目
を閉じる。閉じた世界でも目蓋の向こうに、夕焼けを感
じた。

「お願いやから、そんな顔して笑わないで。」

黒い尻尾が、風に膨らむ白いレースのカーテンに合わせ揺れていた。金色の前髪が微かに靡き、風に吹かれるままの黒い耳が午後の日差しを溜めてふわふわに膨れる。

その隣で、ザフィーラが丸くなっていた。尻尾を抱え込んで目を瞑る青い毛玉は、一流のソファアールよりも心地が良さそうだった。

「フェイト、昨日主が焼いたクッキーが残っているが、食べるか？」

丸い目がシグナムを振り仰いだ。シグナムは手にしたブラックコーヒーに口をつつけつつ歩み寄ると、フェイトの頭に手を置いた。頭を撫でると、フェイトは左目を少し閉じた。この一週間でみつけたフェイトの癖だ。短い毛の生える耳の付け根を搔いてやりながら、シグナムはコーヒーを飲む。

「クッキー。」

フェイトが繰り返す。慣れては来たけれど、あまり自己主張がないのはフェイトの性格だった。表情を見た限りだと、欲しいのかどうかよくわからない。けれど、シグナムはおでこを撫で上げると頷いてみせた。

「食べたいんだな。」

拗ねるから、ヴィータ達には食べたって言うなよ。」

驚いたようにフェイトが目を見開く。どうして判ったのか解らないらしかった。シグナムは軽く笑うと、自分

の足元に目を落とした。

「取って来てやるから、足を離してくれ。」

慌ててフェイトが振り向くと、黒い尻尾がシグナムの足にべったりと擦り寄っていた。

○

「フェイトちゃん、ただいまー！」

思いつきりよくリビングのドアを開くと、はやては両腕を大きく広げた。さあ飛び込んでこいと、そのままのポーズと笑顔で10秒キープ。でも一向に、なにも腕には飛び込んで来なかった。

「食器棚の裏にもう逃げちまったよ、ばかはやて。」
アギトの辛辣な一撃に、はやてが彫像のように固まった。

「どうされましたか、主。」

シグナムは冷蔵庫から牛乳パックを取り出して、台所から出てくる所だった。

「いや、えーっと・・・ただいま。」

はやてはがつくりと両腕を落として、改めてシグナムに帰宅を告げる。

「おかえりなさい、主はやて。」

シグナムははやての様子を訝しみつ、牛乳を片手に

リビングへと出てくる。その足がダイニングテーブルの横を通りかかる時、食器棚の陰にフェイトを見つけた。フェイトは暗がりで見つめた尻尾を立て、目を底光りさせて周囲を窺っていた。

「なんだフェイト、そんな所に隠れて。」

牛乳飲みたい、って言ってたじゃないか。」

シグナムはフェイトの前で立ち止まり、目の前で1リットルパックを振った。すると、フェイトが両手を床についたまま、牛乳パックを追う。振れるパックの左右に合わせて目が動き、後ろで立ち上がった尻尾がメトロノームになっていた。

「ほら、飲むんだろ。」

リビングに行くぞ。」

シグナムがそのままリビングに歩いて行く。するとフェイトは、食器棚の影から顔を出して辺りを見渡した。しきりに耳が跳ねる。しかし、一歩出て来た所で、フェイトははやての姿を認めて立ち止まった。

「・・・なあ、なんやと思う？ あの反応。」

はやてが顔の横に浮かんでいるアギトに問い掛けた。

「嫌われてんだろ、どう考えても。」

お前毎日、もう気持ち悪いくらい撫で回してるじゃん。」

うぐ、とはやてが言葉を詰まらせた。あれから一週間、フェイトが傍に寄って来てくれることが増えたのを良いことに、毎度毎度膝の上に捕まえて、耳やら尻尾やら

頭やらお尻やらを撫で回していたことを、頭も手もしっかりと覚えていた。耳も尻尾の毛も硬そうに見えるけれど、触ってみるとベルベットみたいに柔らかい手触りで、はまったら止められなかった。頭を撫でて耳の付け根を搔くと左目を細くする癖も、尻尾の付け根を触ると尻尾を振って逃げようとするのも何もかもやたら可愛くて、休みの時は日がな一日構っている。今朝、家を出てくるときも、嫌がるフェイトに「嫌よ嫌よも好きのうちやで。」とかいう悪代官ワードを発動させた思い出がある。そのツケが、とうとう払われようとしているのをはやては感じた。

「す・・・、素晴らしい一週間やった・・・せやけどそれはただの夢やったんね・・・。」

フェイトが食器棚の影から、じつとはやてを覗いていた。尻尾が警戒心を示して静止している。

「あれ以上やったら、いくらあのアホ猫でもノイローゼになると思うけどな。」

シヨックに顔を歪めるはやてを眺めながら、アギトが疲れたように呟いた。ザフィーラは我関せずとばかりに、大きなソファの足元にある定位置で丸くなっている。

「さっきまでは一緒にトランプをしていたのですが、

猫は気まぐれと言いますし、気長にやりましょう。」

シグナムがそう言いながら、牛乳をコップに注いだ。「そうそう、お前があんまりアイツばかり構うから、姉御とか拗ねてんだぜ。」

アギトはソファの端に座り、後頭部を掻いた。

「あちやあ、ヴィータ拗ねてたかあ。」

しまつたなあ、とばかりにはやては溜め息を吐くと、制服のネクタイを解いた。あと十分もすれば帰ってくる筈のシャマルとヴィータとリインの三人を思い浮かべる。そういえば、なんだか今朝はヴィータが少しツンツンしていた気がした。あの態度に、ああかわいいなあ、なんて思っている場合ではなかったのだ。

「そうですね、割と・・・、いじめてましたね。」

シグナムが同調すると、はやては唇を突き出した。

「せやつて、フェイトちゃんの耳と尻尾、めっちゃ触り心地ええんやで！」

しかも、見た目の話に傾倒すると誤解を生みそうであれやけど、猫耳と尻尾が生えてるなんて、めっちゃかわいいやん！

これでべたべたするなっていう方が無理やつて！」

アギトは今日一日の疲れが両肩にのしかかってくるようで、「あ、っそう。」と冷たく返した。

そのとき、部屋の隅で青い光が弾けた。

「えっ。」

魔力の光。

弾かれたように振り返ると、そこではザフィーラが人間形態になって立っていた。

「ざ、ザフィーラ・・・お前・・・。」

シグナムが口をぽかんと開けて、人差し指を戦慄かせていた。アギトは思わずソファから墜落して、頭と足の位置を逆にしたままあぐらを掻いている。

「・・・いえ、その・・・。」

ザフィーラは仁王立ちで死んだ武蔵坊なんとかさんの様に立ち竦んだまま顔を俯けた。

「な、なんでも・・・、ありません。」

妙にか細い声でザフィーラがそう呟いた時、はやてが大笑いしながらザフィーラに抱きついた。

「もう、ザフィーラったらなにやっとなるん！」

「かっわええなあもう！」

ザフィーラの顔が真っ赤に染まるのを、シグナムとアギトは見た。そのまま、ザフィーラの腰が砕けて、ソファにはやてごと座り込む。はやてはザフィーラの膝に座って、ここぞとばかりに耳をくすぐった。

「なになに、ザフィーラつてば、やきもち焼いてたん？」

「どうなんや、どうなんやー！」

耳をわっしやわっしや撫でながら、はやてはザフィーラの額に自分の額をくっつけて、ぐりぐりやった。くすぐったそうにザフィーラは首を竦めるけれど、お尻の下で尻尾がばったばったと振られていた。アギトがそれを見ながら、シグナムに告げる。

「お前、そんな悔しそうな顔すんなよ。」

「こつちが悲しくなるだろ。」

アギトからはシグナムの顔は見えていない筈なのに、

シグナムは驚く程の勢いで顔を手で隠した。その音が聞こえて、アギトは溜め息を吐いた。

「どーや、参ったか！」

ひとしきりザフィーラを撫で回したはやてが、自信満々に言い放った。いろいろ使い果たしたザフィーラが、耳を垂らした。

「ふっふ。」

勝ち誇ったように笑うはやて。

その目の前に、横から黒い塊が伸びて来た。

黒いモールのようなそれは、はやての鼻先を掠めて挑発するように動く。はやてはちら、つとそのモールが伸びてくる先を見た。四人掛けのソファの端に、小さい背中が座っている。金色の髪の間から生える黒い耳をこちらに向けて、でも顔は反対を向いて、黒猫が尻尾をはやての前で振っていた。

「・・・お・・・お・・・う。」

はやての腹の奥から変な声が出た。尻尾の先がはやての鼻先を叩く。ふわふわの柔らかい毛がくすぐったい。ああ、アギトの言う通り、撫でくり回すから嫌われちゃうんやよね、抑えて抑えて、と頭の何処かに住んでいる天使の声が聞こえたけれど。はやてはそれを殴り飛ばして、フェイトに後ろから思いつきり抱きついた。

「フェイトちゃんかわいい！」

にやあ、と小さな声がはやての腕の中であがる。

「だからシグナム、そんな・・・泣くなよ・・・。」

アギトが自分からは見えないロードに向かって言うと、袖で顔を拭う音がした。

○

お風呂上がりの方のフェイトの髪を拭きながら、はやてはほったたをつついた。柔らかいほったたがむにむにと形を変える。

「ん、結構ふつくらして来たなあ。」

よしよし。」

随分と血色がよくなっていた。頬だつてこけ気味だったのに、今はだいたい丸みを帯びているし、皮と骨みだつた腕にも肉の柔らかさを感じる。尻尾も耳も、心無しかきりりと締まって見えた。

「お腹は痛くない？」

おでこから前髪を拭いてやりながら問うと、フェイトは目を細めて頷いた。

「うん、痛くない。」

「そっかそっか、良かったなあ。」

嬉しくて髪をくしゃくしゃすると、尻尾が稲穂みたい揺れた。それを微笑ましく眺めながら、あれだけ食欲があるんだから、お腹が痛いわけないよねえ、としみじみはやては納得する。フェイトはご飯を出してあげると、

とても行儀よく食べる。食べ物零したことは無いし、ヴィータと違って教えればすぐに箸も上手に正しく使うようになった。

その代わりかどうかはわからないけれど、中学生の男の子みたいに良く食べた。あんまり急激なペースで太らせるのはフェイトの為にならないかなと思うので、一人分はこれだけ、と取り分けてあげている。だが時折、はやての皿を尻尾を振りつつ見ているのだから困りものだ。一番自分に甘そうなのが誰なのか、大人しい顔をしている癖にちゃんと判っているらしい。小憎たらしくも可愛い子だった。

「魔法はどう、結構使えるようになってきた？」

フェイトは首を傾げると、頭上に10基のスフィアを展開してみせた。金色の雷が弾ける音がリビングに響き渡り、魔法の緊張音が満ちる。

「うん、ほら。」

すつごく元気なときは、もつと出せるけど、今はこれだけかな。」

フェイトがほがらかに顔を綻ばせた。その一方で、はやてはこめかみから一筋汗を垂らした。

「あ、えーっと・・・。」

こんなところで攻撃魔法なんて発動させると・・・。」はやてが躊躇いがちに制止をしようとしたその時、けたたましい足音が廊下を転がって来た。

そして、リビングの扉が蹴破られて、真っ赤な頭が飛

び込んでくる。

「おいはやて、賊か!？」

頭上に殺る気に満ちた鉄槌を振りかぶり、ヴィータが怒鳴り声を上げた。優秀な守護騎士は、家の中であろうと主君を守る為ならば瞬時に戦闘態勢へとシフトする。

しかし雲の騎士は、何をするでもなく、フェイトの頭上に輝く10基のスフィアを見て肩をずっこけさせた。鉄槌が手から滑ってゴン、と床に落ちる。あ、フロリーングが、とはやてが擦れた悲鳴を上げた。

「あ、あー・・・っそういうあれか。」

どういうあれなのか、聞いているはやてには解らなかつたけれど、ヴィータが状況を把握してくれたのだけは解った。ヴィータは面倒くさそうに顔を掻きながら、フェイトの方に左手を翳す。

「なに?」

フェイトは不思議そうにヴィータを眺めていた。けれどヴィータは頭を軽く抱えたまま、開いた左手に力を込めた。赤い閃光が一瞬、ヴィータの掌で弾けた。

刹那、フェイトの頭上のスフィアが粉碎され、金色の破片になって降り注ぐ。

「あ。」

フェイトは目を見開いて、砂金のように散る自らの魔法の欠片を追った。

「家の中で攻撃魔法なんて発動させんなよ。」

シグナムが夜勤で居なかったからいいけどさあ、居た

ら説教食らうぞ。」

はあ、と重い息を吐いて、ヴィータは足元に散らばっている自分のパジャマを拾った。お風呂に入ろうとしていたところを、丁度邪魔してしまったらしい。

「ヴィータ、ごめんなあ。」

はやてが謝ると、ヴィータは手をひらひら振った。

「いーよ、別に。何にも無かつたんならそれで。」

そいつもまあ、元気になったみたいだし。」

ヴィータは道々に落として来た着替えを拾いながら風呂場に戻って行く。フェイトはその後ろ姿を見つめて、それからはやてを振り返った。

「悪いこと、しちゃったのかな。」

耳が項垂れて、尻尾の先が力なく垂れる。はやてはフェイトの頭を撫でると、大丈夫やよ、と答えた。

「みんな、心配してくれてるだけやから。また同じことをしなければ怒らへんよ。」

それを聞くと、フェイトが微かに唇を緩めた。時折零すフェイトの笑顔は穏やかで優しい。はやては同じように笑みを返すと、タオルをフェイトの毛先に当てた。タオルで押し挟むようにして、水気を取る。

「マスターとの念話は通じるようになった？」

はやての問いに、フェイトは首を横に振った。

「まだ。」

はやてはタオルを取ると、髪を避けて首周りに掛けさせた。フェイトの首には、錆びた鉄の鎖が絡んでいる。

「そっか。」

ごめんな、私の方も、なかなかマスターを見つけてあげられなくて。」

猫の耳が、髪の中に倒れた。

はやてはフェイトを抱き寄せる。

「私、一人で帰れるよ。はやて。」

フェイトがはやての服の裾を、両手できゅつと掴んだ。

「でも、次元転移するんやろ？」

もし失敗したらどうなるか、フェイトちゃんかて判つてるやん。万全やないのに、危なくてそんなことさせられへん。」

フェイトがはやての肩口に顔を埋めた。頬に触れるフェイトの髪は濡れていて冷たい。

「マスターからは、なにも連絡あらへんの？」

背中を撫でる。耳を寝かせて、フェイトが小さく鳴いている気がした。

「マスターはあんまり魔法が得意じゃないから、私からじゃないと繋がらないんだ。」

ほとんど、私からの出力でしゃべってるから。」

くぐもった声が、自分の肩口から響く。服を越して伝わってくる息の熱さを感じながら、はやては静かに頷いた。

「そっか、じゃあ、やつぱりフェイトちゃんまだ全然元気になつてないやね。」

本当はそうじゃないんだろうな、と思ひながら呟いた

言葉。フェイトがはやてにしがみついた。「いつもだったら伝わる力でしゃべってるのに、どうしてなんだらう。」

はやてはそれに、答えてやれなかった。

○

「行くぞ、ザフィーラ！」

アギトがそう叫んで、塩化ビニルのボールを高々と空に放り投げた。ザフィーラは軽く四つ足で駆けると、強く地面を蹴って大きくジャンプする。口を大きく開いて、勇ましい歯で宙を舞うボールを上手くキャッチした。

「ザフィーラ、すごいね。」

フェイトがにこにこすると、ザフィーラはボールをフェイトへと放る。器用なもので、それは寸分違わずフェイトの胸の辺り、丁度取りやすい所へと飛び込む。

「よしっ。」

フェイトは格好良く片手でボールを掴むと、得意げに笑う。きつと猫だったら、頬ひげが全開だ。尻尾の先をちりんと動かし、フェイトはラインへと向き直る。

「ライン、行くよー。」

「ばっちこいですー！」

ラインは両手をぎゅっと握り締めると、自信満々に応

えた。フルスケールでも小学生くらいの身長のリインはフェイトよりも少し背が低い。それを気にしてか、フェイトが肩の下からゆるく放り投げた。

「シヤマル、庭で天使達が戯れとるよ。」

はやてはリビングからそんな庭の様子を眺めて、隣に座るシヤマルにそう零した。

「ザフィーラも天使のうちですか？」

シヤマルが頬を掻くと、はやては頷いた。

「そらそうやろー。」

お日様であったまってる毛がふつかふかになつとつて、おつきな毛玉みたいやんか。」

それ、褒めてるんですか、とシヤマルは聞き返したくおいた。はやては時々親バカだ。シヤマルからみれば、そんなところが可愛いのだけれども。

「あれから二週間、フェイトちゃんも随分懐いてくれましたね。」

なんだかんだ言ってたアギトなんて、いまやフェイトちゃんが一番の遊び相手になってますし。」

晴れ渡った空から降り注ぐ太陽の光が、外の四人に降り注いでいる。放られたボールが大きな放物線を描いて、アギトの頭上を通り過ぎる。そんなフェイトの大暴投を、アギトが走って取りに行く。フェイトの耳がぺたんと垂れていた。

「アギトはなんやかんや言っても、根が真面目やからな。ちゃんと仲良くしてくれると思っとったよ。」

ボールを拾ったアギトが、レーザービームのようにリンに投げ返した。だけどそれも大暴投で、リンの耳の脇を一直線に吹き抜ける。リンが即座に怒り出して、ボールを取るとアギトに投げつけた。

「ふふ、言えてますね。」

シヤマルが口の中で笑いを噛み殺すと、はやてはその肩を軽く小突いた。

「ところで、使い魔の契約引き継ぎ、もう出来るようになったんですか？」

その言葉に、はやてはシヤマルへと顔を向けた。そうして、歯切れ悪く言う。

「まあ、一応教えて貰ったんやけど、あれめっちゃ難しいんな。魔力の制御がとんでもなくシビアで、頭おかしくなりそうやもん。」

両手の平をだらしなく見せて、はやてはうんざりとはかりに頭を傾けた。シヤマルははやての思った通りの反応に、困ったように眉を寄せた。

イメージとしては、壊されて行く砂山に違う砂を持って来て、削られた場所から即座にせつせと元の形に作り直して行く作業に近いだろうか。砂山が使い魔、削り取られて行く砂が元の契約者の魔力で、足される砂が新しい契約者の魔力。契約者の魔力で体を構成している使い魔にとって、契約を別の人間に引き継ぐということは、

体の部品を全て取り替えるということに等しい。

人に引き継がせるつもりで、ゆつくりと契約を移行させて行くことは難しいことではない。崩した砂山を自分のペースで作り返すことが出来るからだ。

だがはやてが出来るようになっておきたいのは、瞬時に失効される契約を引き継ぐ方法だ。フェイトの契約を引き継ぎたいと契約者に言っても、受け入れてもらえなかったという時に備えてのこと。だけど正直、道のりは険しい。

「はやてちゃんはあんまり、繊細な出力は得意じゃないものね。」

シヤマルの同情に、はやては情けなくなりながらも大きく頷いた。

「気を抜くとすーぐ、要求されてる出力の一桁上になっちゃうんよね・・・。つか、どんだけ魔力の総量少ない人でも、あの精度での操作なんて至難の技やろ。」

しかも処理は速ければ速い程いいって、ケンカうっとなのかっての。10個とは言わず、出来る分だけ並列処理した方がいいよ、って脳みそが死ぬわ。」

悪態を吐くはやての視界の隅、庭ではまたボールが大きく空に飛んだ。

「でも、教えてくれた人は出来るのよね。」

頼んじやわないんですか？」

はやては膝の上で頬杖をついた。そして、レースのカーテン越しに見えるフェイトの楽しそうな後ろ姿を眺

める。

帰りたい、帰れると言ったフェイトを引き止めたのは自分だ。あの時、行くのを止めたフェイトが最後に呟いた言葉が耳から離れない。

フェイトは、はやてが悲しそうだから、まだ居るね、とそう言った。

「契約者は、フェイトちゃんがあるの待つてるんやと思う。フェイトちゃんがだんだん元気になって来てるのも気付いている筈やから。」

だから、まだ時間はある。」
尻尾が跳ねて、耳がそよ風に揺れている。

背中のお金が靡く。

「本当にどうしようもなかったら頼むけど。」

私は、これをちゃんと私とフェイトちゃんの問題にしたいんや。」

ボールを追いかけてこちらを振り返ったフェイトは、輝くような笑顔を零していた。

∴

今日の夕飯はハンバーグだ。

「はやてのご飯はやつぱりうまいな！」

ヴィータが大きな口にハンバーグを入れながら、大き

く頷いた。

「へっへえ、料理はこの八神はやてにお任せあれ！」

はやては高らかに言い放つと、自分の腕をぱしつと叩いて見せた。

「はやてちゃん流石ですうー。」

ラインが軽い拍手をくれて、はやては照れ混じりに頭に手を当てた。

「どうもどうも！」

こここのところ、フェイトに好き嫌いがあるかどうかにかなり慎重になっていたせいで、予てよりリクエストのあったハンバーグをずっと控えていた。けれど昨日あまりにひき肉が安かったのと、フェイトは何でも食べるということが判って来たから、思い切って今晩はハンバーグに踏み切った。猫にたまねぎを食べさせてはいけない、という都市伝説なんだかマジなネタなんだか判らない話を怖れていたというのもある。

「フェイトちゃん、ハンバーグどう？」

隣の席を振り向くと、フェイトは無言でハンバーグを食べていた。その横顔は、鬼気迫る程に真剣だ。どうやら、えらく気に入ってくれたらしい。ソースケチャップを付けたりステーキソースを出したりしているフェイトの背中でお尻尾が大きく揺れていた。

「そんなに真剣に主ははやての手料理を食べるとは、なかなか判ってる奴だ。」

シグナムがみそ汁のお椀に箸をつけながらそんな台

詞を口にした。それがどうにも、イマイチ意味が判らないのが可笑しい。はやてはハンバーグを箸で器用に切り分けると、一欠け口に入れた。

「ん、今回、この焼き加減はばっちりやな。」

リストラされたら料理屋開いて一発あてられるで。」

言い過ぎかな、とちらつと思つたけれど、シグナムもヴィータもリインもしきりに頷いて見せた。シヤマルは「もう、はやてちゃんつてば。」と朗らかに言う。足元でザフィーラが一声吼えた。

「ま、確かに旨いけどな。」

アギトだけはつれない様子でそう呟くと、サラダを摘んだ。手元の皿には、もうハンバーグは四分の一しか残っていない。

「ふ、胃袋からこのミッドチルダを征服したるで、なんてな。」

ころころと笑い声を上げるはやての隣では、既にフェイトがハンバーグを食べ終えていた。一緒に食べてしまったのか、ご飯茶碗も空っぽで、米粒一つ残っていない。お味噌汁はまだあるけれどあと半分。サラダは好きなだけ取る方式だから、いくらでも食べ放題だけれども、フェイトはむずむずと口を動かしてソースが付いているだけになった自分の皿を見つめていた。黒猫耳がしよぼくれて、尻尾の先がぼつきりと折れている。

「でもなあ、はやてが料理屋やつたら、みんながはやての作った料理食べるんだろ？」

ヴィータがコップを手にし、刑事ドラマよろしく鋭い目つきをした。

「そりやあ、そうじゃないと潰れるじゃん。」

アギトが仰ぐと、ヴィータは不満げに唇を突き出した。「はやての料理、すげーうまいんだぞ、つて自慢してやりたいけどさ。なんか、みんながはやての料理を食べてるのも、なんか悔しくないか？」

また始まった、とばかりにアギトが顔面を引き攣らせる。この家で暮らし始めてあんまり長くはないけれど、この面々がどれだけははやてバカかはもう知っていた。外では澄ました顔をしてるくせに、一皮むけばどうにも甘つたれだ。別に嫌いじゃないけれど。

「まあ・・・、判るな。」

そして、自分のロードが頷くのは想定内の範囲だったけれど、それでもアギトはがつくりと肩をすっこけさせた。ロードがこんなにあほだと、自分の立場が無いように感じる。もうどうしようもないけれど。

「じゃあ、今から、その日の為に開店資金でも溜めよつかねえ。」

冗談めかしていいながら、はやてはハンバーグを食べた。口の中に広がるタマネギの甘さと香ばしい肉の味を噛み締める。やっぱり今日は会心の出来だった。

「あ、はやてちゃん、口の端についてますよ。」

斜め向かいに座るシヤマルが、そう言つてははやての口の端に手を伸ばそうとした。

そのときだった。

フェイトが、はやての口に付いていたハンバーグの欠片を舐めとった。

「………へ？」

世界が止まった。

八神家のダイニングの空気が静止し、全員の視線が一点に縫い止められる。

黒い耳をばたばたと上機嫌に動かし、S字の尻尾を揺らして、口をもごもごさせているフェイトに。

「え？ えっ？」

何が起こったのか、はやてがフェイトの唇が触れた所を手で覆う。舐められたせいかほんの少し濡れていて、はやての顔面が真っ赤に変わる。

そして、時が動き出す。シグナムが、ヴィータが、シヤマルが、ラインが叫んだ。

『ああああああああああああっ！！』

天井を突き破ろうかという爆音に、フェイトが椅子から飛び上がった。みなが自分を穴が空きそうな程に見ていることに気付いて、それからはやてへと視線を送った。

「あ………えっとお……。」

何かフオローをしてあげたかったが、ゆでだこになつた頭では、はやてには何にも浮かんで来ない。そんなはやての様子を見て、フェイトはようやくやくなんでみんなが

一斉に立ち上がったのか理解した。フェイトを見つめるみんなの背中から、謎の陽炎が立ち上っている。

フェイトは逡巡するように目をきよろきよろ動かしながら、片耳だけぴんと立て、首を傾げて笑顔を見せた。

「にやあ。」

身を守る為の、全力のごまかし笑い。

「あああ、もう、フェイトちゃんかわいい！」

その刹那、はやてが隣の席から飛んで来た。

『ああああああああっ！！！！』

そして、嫉妬の音が屋根を吹き飛ばした。